
はじまりのコトバ

愁しゅう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はじまりのコトバ

【Nコード】

N5016E

【作者名】

愁しゆう

【あらすじ】

楠木悠也は、男なのに学校のミスコンで優勝し、なぜかマドンナになってしまった。そんな悠也を妬んだクラスの女子から庇ってくれた、井上一芳に惹かれて…。

（前書き）

女の子っぽいカンジの男子がニガテな方は、読むのを避けてくださ
い…。

たった一言で、そのひとを好きになってしまふことが、現実にあると思つてなかった。

全校生徒が好奇心いっぱい目で見つめるステージ上で、ぼく^か木悠也^{ぶうぎや}は、緊張とそのための吐き気で足をガクガクと震わせていた。ぼくの横に並ぶ四人はみんな女の子。

なぜなら、これは…

「では！今年の我が校のマドンナを発表します！」

毎年の恒例行事らしい…ミスコン、だからだ。

まかり間違つて推薦されてしまったぼくは、それこそまかり間違つて最終審査まで残つてしまっている。

男子の視線は揶揄、女子の視線は軽蔑。

それは小学生のころから変わらない。

だれひとり、ぼくをぼくとして見てくれない。

たとえ、外見がよかったとしても…ひとりなら意味がない。

…気持ち悪い。はやく…みんなの前から姿を消してしまいたい。

けたたましく鳴るファンファーレも、ぼくには騒音にしか聞こえない。

「満場一致で、一年C組楠木悠也くんです！」

スポットライトに目が眩んで、さらに体調が悪化する。

クスクスという小さな笑い声と、わざとらしい拍手の中、司会者の生徒会長がマイクを向けてきた。

「二年三年のお姉さま方を差し置いての受賞！いまのお気持ちは？」

…どうでもいいから、はやくここから降ろして。

「…嬉しいです。投票ありがとうございます」

「いやあ、新マドンナは慎み深いですね」

ぼそぼそと決まり切った言葉を述べると、生徒会長はあからさま

に押揃ってきて、その口調にどつ、と体育館は笑いの渦に巻き込まれた。

ぼくは、この学校のピエロだ。

高校生活も、きつと、いままでと変わらない。

「男のクセしてマドンナなんて、バツカみたい」

教室のドアを開けた瞬間飛び込んできた声に、つい入口でそのまま固まってしまった。

喋っていた女子は、ぼくの姿を見ても別に悪いことは言っていない。って具合に睨んでくる。

リップグロスを塗りたくったテカテカな唇と、合成繊維のバツサバサな睫毛、ふくよかなバストをした彼女は一次審査で落ちていた。きつと、自信があっただろうな。

彼女を取り巻く女子も、鼻で笑ったような表情だ。

そんなの、とうに慣れてる。

なるべく同じ中学のひとつがない学校を選んでも、結果はいつも変わらない。

だから、いいんだ。もうどうでもいいよ。

無言で自分の席に戻ろうとすると、誰かに右腕を掴まれた。

そのまま腕の先を見ると、アッシュグレーのメッシュが入った前髪が目映った。

「井上……くん」

右にふたつ、ひだりにみつ、ピアスをしてる彼、いのうえかずよし井上一芳は、ちよつとした有名人だ。

入学式には、きれいな女性にオープンカーで送ってもらっていて、毎日違う女の先輩を連れ歩いて、保健室の先生ともいろいろあるらしい。

友達がいなばくの耳にも入ってくるほど、遊び人な彼の噂は入ってくる。

「なんだ、ちゃんと喋れるんだな」

なにも言わないから喋れないかと思った、と口の端をあげて笑って立ち上がると、くしゃくしゃとぼくの髪を掻き撫でた。

こんなふうに触られるのははじめてで、なぜかドキドキと胸が騒いだ。

「やわらかい髪。目も唇も自然でこんな、なんだから、おまえらみたいなのツクリモノの女が勝てるワケねえだろ」

「っ！なんですって！？」

「あんただって、その女をとつかえひつかえしてるでしょ！」

『ツクリモノ』という言葉に反応した女子が、一斉に井上に怒りの矛先を向けた。

ギャーギャー喚くな、としかめっ面をして耳を塞いだ彼は、なんとぼくの体を腕の中に収めてしまった。

あ、タバコの匂いがする…。

「別にツクリモノが悪いとは言ってねえだろうが。ただ、こいつは本気で可愛いんだからしょうがねえって話。あんまし僻むと性格歪むぜ？」

キーッ、っていう金切り声が聞こえてきそうなほど、彼女たちは顔を真っ赤にしている。

ああ、井上はぼくを庇ってくれたんだ。

見た目、不良？っぽいけど…いいひとなんだなあ。

「…かわい、い？」

「可愛いからマドンナ様選ばれたんだろ？もっと、自信もってるよ」

いま、ぼく…声に出してた？

自信、なんて…ぼくなんかがもってもいいの？

目顔で問いかけると、彼は頷いて笑った。

そして、もう一度くしゃり、と撫でられた頭が、なんだかとても熱くて…胸がきゅっとした。

放課後、日直で最後まで残っていたぼくは、担任から健康診断の

問診票を取ってくるように言われて、保健室へ行った。

けれど、少しだけ開いたドアの隙間から、女性のか細い声が聞こえて立ち止まった。

どうしたんだろう、と覗き込んで…そのまま動けなくなってしまう。

最初に見えたのは、保健の先生のすらっとした足と、その先で脱げそうになった黒いハイヒールだった。

「っ」

そして、その足を支えて体を密着させていたのは…井上だった。

彼は眉間に皺を寄せて目を眇め、僅かに開いた唇からは小刻みに呼吸の音が漏れている。

なにをしているのか、なんて、実際に経験のないぼくにだって判った。

見てはいけないのに、どうしても目が逸らせなかった。

しかも男なら、夢中になって見るのは先生のはずなのに、ぼくの視線はずっと彼に縫いとめられている。

頬を伝う汗と、息を詰まらせる声。

…そして、やわらかく弛緩していく表情。

「っ、は…」

気がつくと、全身にぐっしりと汗をかいていた。

身体が中心が熱を持って苦しい。

どうしよう、どうしよう。

はじめて覚えた欲情、という感覚にすっぱりと飲みこまれてしまう予感がした。

胸の奥底から溢れ出して、迫ってくるモノから逃げるように、ぼくは鞆も置き去りにして家まで全力で走り続けた。

それから、ぼくは井上を見ることができなくなった。

彼を、ぼくの汚い欲望で穢してしまったことが、いたたまれなくて…申し訳なくて。

それでも、どうしようもなく彼を好きになっちゃってしまっていて。

この、芽生えてしまった想いと欲望を、どうしたら手放すことができるのかな…。

「あーっ、もう！フラレた！」

教室中に響き渡るような声で叫んだのは、例のミスコン一次審査敗退の彼女だ。

「ま、これでスッキリしたんじゃないの？」

「そうだよね。次行こっか！」

…それは、あまりにもあっけらかんとしすぎてるんじゃないかな。どうでもいいけど。

あ、そっか。フラレれば、少しは軽くなるのかなあ。

そうしたら、彼をぼくの中で、あんな目に遭わせなくてすむのかな。

ちらつと見た井上は、どこかつまらなそうに窓の外を眺めていた。

放課後、思い切って話しかけて、呼び出すことに成功したのは奇跡だと思う。

『もっと、自信もってみるよ』

彼のその言葉がぼくに勇気をくれた。

それでも、緊張して足はずっと震えてるし、恥ずかしくて涙が溢れてくるのは止められない。

「こいびとにしてください」

そう頭を下げると、彼はふうん、とぼくを観察しているみたいだった。

どんな表情をしてるのか確かめるのが怖くて、顔を上げられない。失敗した、かなあ…。

ここでフラレても、明日また教室で会うんだ。クラス中に、ぼくが告白したことが広まるかな…。

うつん、彼はそんなことをするひとじゃない。

だったら、最初からぼくなんかを庇ったり、しない。

「ぼくで満足できなかったら、浮気しても…いいから」
え…？なに、言ってるの…ぼく。

フラレにきたのに、そんな食い下がるようなこと、どうして言ってるの？

あつ、と思つて顔を上げると、井上は少し険しい表情をしていた。
ぼくが告白なんてしたから、気を悪くした？

「そんな覚悟があるなら、まあいいよ」

けれど彼は、ぼくが予想してなかったことを言ってくれた。

一瞬、なんて言われたのか判らなかった。そのくらい、信じられないことだ。

…ほんとうに？ぼくで、いいの？

こいびとに、してくれるの…？

「っ、嬉し…い…」

溜めこんでいた涙が、とうとう溢れて頬を伝った。

はじめて好きになったひとが想いに応えてくれる、そんな幸運があるなんて。

涙が止められないぼくの頭を、彼はその大きくてあたたかいてのひらで、撫でて慰めてくれた。

言葉にできない想いが溢れて、ぼくは彼に抱きつくことでしか言い表すことができなかった。

彼と付き合いはじめて、ぼくは変わったと思う。

自分でも驚くほど、わがままでずうずうしくなった。

「カズくんなんか、大っ嫌い！」

ばっちーん！と彼の頬が大きく音を立てた。

浮気は許したくないけど、最初に言ってしまった手前、どうしてももうやめて、って言えない。

ウザイとか迷惑とか言われてフラレたら…それこそ、死んでしまいたいからだから。

浮気を知って最初に平手で打ってしまったときは、ほんとうに無

意識で、どうしようって思ったけど、そのあとに彼はとろけそうな甘い言葉で慰めてくれた。

彼にとってぼくは、もしかしたら毛色の違うおもちゃ、くだらない存在なのかもしれない。

けれど、いまは彼の瞳の奥にある、やさしい色を信じてる。

叩いても怒らない彼の気持ち、ぼくだけに向けられることを願ってる。

「このローション、いい匂いだな」

カズくん（ちよつと恥ずかしい呼び方かな？）が、ベッドサイドに置いてあるボディローションを手にして、鼻をクンクンと動かしていた。

「うん、マンゴーっていい香りするよね。カズくんがぼくからするって言うてる、甘い匂いってコレでしょ？」

カズくんはぼくと付き合おうと思った理由に、ぼくから香るらしい、甘い匂いもあったと教えてくれた。

マンゴーの写真がパッケージの、そのローションは、最初は父さんが母さんのご機嫌とりに買ってきたものだった。

でも気に入らなかった母さんに押し付けられて、そのままリピート購入するほど愛用してる。

「いいや、違う。ユウのはもっと熟れてる甘さっていうか…なんなんだろうな？」

「それはこっちが訊きたいよ」

ぼくがクスクス笑うと、カズくんがぼくを引き寄せて、髪に顔を埋めてくる。

「ん…、やっぱりこっちのがいい匂い」

髪ってことは、シャンプー？でもフルーツ系の香りじゃなかったはずだけだなあ。

髪に触れる吐息がくすぐったくて、もうやめて、と彼のシャツを掴んだ。

「…あ、うん…っ」

すると、彼の唇がすつ、と移動してきて、ぼくの唇に触れてきた。最初はぼくの唇を堪能するように、自分の唇で挟んだりやわらかく歯を立ててきて、それからゆっくりと、ぼくの口腔内に忍び込んでくる。

ぼくの、ぽってりとした唇は、なんだかタラコ唇みたいで恥ずかしかったけど、カズくんはそれがいいって言ってくれるんだ。

どうやら彼はそうとうのキス好きらしくて、それこそまったく経験のなかったぼくは、キスだけでぐったりしてしまう。

「…は、あ…っ」

力が抜けてベッドに沈んだぼくの唇を追いかけて、カズくんが覆いかぶさってくる。

「も、苦し…、やだ…っ」

「腹、減ってんだよ。もつと食わせろ」

そのやりとりの間も、彼の舌や唇はずつとぼくの唇に触れて離してくれないんだ。

それだけでなく肉厚なぼくの唇が、さらに真っ赤にぷっくり腫れるまで続けられる、甘い甘いキス。

意識が朦朧としてきて、恥ずかしい気分になってくるけど、まだそれ以上はない。

ぼくに合わせてゆっくりと歩んでくれている、彼の心が嬉しくて、けれどいつも胸が切なくなる。

あのね、カズくん。

ぼくはもつと、欲深い人間だよ。もつと、カズくんが欲しい…ぼくのぜんぶが融けて、ドロドロになってしまふほど、深く愛されたい。

「カズ、くん」

「ん？」

「だいすき」

ぎゅっ、と抱きついたぼくに、彼はちゅっ、と啄むやさしいキスをくれた。

（後書き）

続きがあれば18禁指定になります…。

年齢が到達してない方や、それ以上の描写が苦手な方はスミマセンです…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5016e/>

はじまりのコトバ

2010年10月8日15時44分発行